

## 南方熊楠におけるヨーロッパ的

### 科学思想と密教的世界観の統合

千 田 智 子

はじめに

南方熊楠（一八六七—一九四一年）は、科学と宗教をひとつの世界観のうちに統合しようとした稀有な思想家である。だが、南方思想の両輪ともいえる科学観と宗教的世界観は、つねに調和的な関係を取り結んでいたわけではない。両者は絶えず、南方の内的世界において対峙し、緊張関係にあった。本稿は、南方が科学と宗教的世界をどのように関係づけたかをみることによって、南方思想の本質を考察する。

南方の思想的展開は、彼の友人である真言宗の僧、土宜法竜に宛てた書簡のなかにみることができるといえる。南方と法竜は、明治二六（一八九三年）一〇月からの五か月間と、南方が帰国した後の明治三六（一九〇三年）から明治三七（一九〇四年）にかけて、膨大な

量の書簡を往復させた。

科学に対して消極的、むしろ批判的な態度をとる法竜に向けて、南方は言う。「仁者いたずらに心内の妙味のみを説いて、科学の大功用、大利則あるを捨つるは、はなはだ小生と見解を異にす」（『全集』第七巻、一五三頁<sup>1</sup>）。南方は、宗教が心の中の事柄だけにこだわって科学を切り捨てるのを、つまらないと感じていた。それどころか、科学が解き明かそうとする原理的な部分と、教義が矛盾するようななら、その宗教は駄目だとさえ言う。

このような南方の姿勢から、南方の科学と宗教にたいする基本的なスタンスが導き出せる。科学と宗教は、一見共通点がないように見える。だが、自然に対する人間の理解のかたちという点において、両者は同じなのだ。南方は考えたのである。このとき南方は、科学と宗教を同じ世界観のうちに両立して捉えている。そ

のとき彼の思想において重要な意味をもつてあらわれるのが、「事の学」である。

「事の学」から「南方曼陀羅」へと至る南方の思想展開は、科学与宗教との統合という点に照らして非常に興味深い素材であり、本稿はその観点から、南方の思想の基盤となる「事の学」を軸として考察を進めてゆく。南方の思想的側面に関してはすでに、南方の自然観と宗教観の関係について論じた芳賀(一九九五年)<sup>(2)</sup>、南方の青年時代の思想の跡を精緻に分析した松居(一九九一年)<sup>(3)</sup>、さらに南方思想をアリストテレスとの関連においてとらえた三村(一九九七年)をはじめとする優れた研究がある。そこで本稿はとくに、南方思想に内在する宗教と科学の緊張関係と統合という側面を照射することを旨とした。

## 一 進化論をめぐる

一八五七年、ダーウィンが『種の起源』によってあらわした理論は、生物学のみならず、さまざまな学問分野にとつて衝撃であった。その影響は、一九世紀後半の学問界に広く及び、南方もアメリカ時代の青年期にダーウィンの著作を英書で読破し、多分に触発された。だが、ダーウィンと並んで、あるいはそれ以上に彼が強く支持した人物があった。それは、当時の欧米の思想界のリーダー的存在であったハーバート・スペンサーである。スペンサーは、「進化」(evolution)という概念を、単純なものが順次

複雑なものに変化することだと捉え、地球、生命、さらには社会の現象全般における普遍的法則として「進化」を据えることで、総合的な哲学体系をつくりあげた。

ロンドンに渡った当初の南方は依然スペンサーをつよく敬愛していた。だが八年のロンドン生活のあいだに、スペンサーに対する彼の姿勢は一変する。

「史を案するに、心性上の開化は物形上の開化とは大いに違い、一盛一衰一盛一衰するが、決して今のものが昔にまされりといいがたし。反つて昔の方が今よりまされり、といえり。これは仁者の言に良く似ていて、科学上の証も挙げたなり。ハーバート・スペンセルなど、何ごとも進化進化というて、宗教も昔より今の方が進んだようなこといえど、受け取りがたし。」(『全集』第七巻、二二六頁)

このように、とくに宗教の進化に関するスペンサーの理論に対して、南方は強い違和感を表明するようになる。進化の法則から事象の一切を演繹的に説明づける、スペンサーの強力な哲学的思考力に、南方は魅了されていた。だが、その理論構築の強固さを可能にしている、世界の二元的把握への疑いが次第に膨らんでいった。南方のロンドン時代は、進化論との関係からみると、スペンサーへの熱狂的支持から批判への変遷であった。

「世界ということ、その開化の一盛一衰は、到底夢のようなものにて、進化と思ううちに退化あり、退化するうちに進歩あるな

り」(『全集』第七巻、二二七頁)。ロンドン時代後半の書簡の数か所に、この種の記述を確認することができる。南方の思想は、「実は進化ならで進退化論なり」(『全集』第八巻、二二三頁)という方向へと歩みをはじめ。こうしてスペンサー理論から離脱しようとする明治二六(一八九三)年、「事の学」が語られる。

## 二 「事の学」の誕生

— 多元的な世界記述への模索

「事」という概念に関する記述は、南方の思考の特徴を端的に現している。彼にとって、「事」とは「心」と「物」が合い交わることによって生じる出来事の一切を指す。「今、心がその望欲をもて手をつかい物を動かし、火を焚いて体を暖むるときより、石を築いて長城となし、木をけずりて大堂を建つるときは、心界が物界と雜りて初めて生ずるはたらきなり」(『全集』第七巻、一四五—一四六頁)。このように、「心」的な要素と「物」的な要素が接触して生まれるはたらきを、「事」と呼ぶのである。

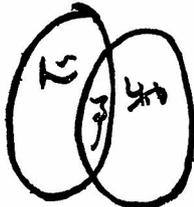


図1 第「全集」第  
七巻、p.145

「心界」と「物界」それぞれがもつ法則の異質性がぶつかりあうところに、「事」という概念の重要性がある。「この物心両界が事を結成してのち初めてその果を心に感じ、したがってその感じがまた後々の事(心

が物に接して作用を現出すること)の因となるなり」(『全集』第七巻、一四七頁)。「心」が「物」と交わり、「事」をつくり、その「事」がまた「心」や「物」に出会うことによって、あらたに「事」が生まれる。世界に現象するすべての出来事は、このような無限の連鎖によってつくりだされる。そして、彼が考えるそのような因果の連鎖は、決して単線的なものではない。それは、重層的に絡み合って多様な出来事を産出するような連鎖関係である。「事」に端的に止められる、彼独自の思想展開は、南方が培ってきた東洋の世界観と、西洋で受容した科学思想とのせめぎあいのなかで生まれた。南方は彼独自の方法で、多元的・重層的な世界の記述をこのときすでに始めていた。それは、南方熊楠というユニークな知性の目覚めでもあった。

## 三 「事の条理」

進化論は西洋において万物の創造主たる神に根源的な懷疑を投げかけるものでもあった。ところが南方は、科学の眼によって明らかにされた生命の流れを、真言密教の世界観でもう一度とらえ返す。ここに、南方熊楠という思想家の特異な点がある。南方が用いる進化(同時に進退化)という概念は、種の多様な分岐、流動的で多元的な生命の展開を想定しているダーウィンと重なる部分も多い。だが、南方はそのような生命の変化の流れを、大日如来に支えられる世界と重ね合わせてみている。



図 2 (『全集』第七卷, p.391)

「この心界が物界とまじわりて生ずる事(中略)という事にはそれぞれ因果のあることと知らる。その事の条理を知りたきことなり。」(『全集』第七卷、一四六頁)

南方は、人の心や行為と自然界の法則が交差し、互いにまじわるところを注視している。その相互を横断する、何らかの力の存在に彼は目を向けているのである。つまり、「心界」と「物界」がまじわるところには「因果」という、たいへん重要なはたらきが潜んでいる。それを南方は「事の条理」と呼ぶわけである。彼は、そこで言う「因果」を、縁と起という概念と関連つけて次のように述べる。

「因はそれなくしては果がおこらず。また因果なればそれに伴って果も異なるもの、縁は一因果の継続中に他因果の継続が竄入し来たるもの、それが多少の影響を加うるときは起(甲図。熊楠、那智山にのぼり小学校教員にあう。別に何のこともなきときは縁。)(乙図。その人と話して古え撃剣の師匠たりし人の智ときき、明日尋ねるときは右の縁が起。)(図2参照)。(『全集』第七卷、三九二頁)

南方の考えでは、因果の継続は仏教世界を成す力の連鎖の基本

形であり、必然性である。また「縁」は、「一因果の継続中に他因果の継続が竄入し来たるもの」として説明され、ある因果の継続が、異なる因果の継続と交差するというものである。「故にわれわれは諸多の因果をこの身に継続しおる。縁に至りては一瞬に無数にあう。それが心のとめよう、体にふれようで事をおこし(起)、それより今まで続けて来たれる因果の行動が、軌道をはずれゆき、またはずれた物が、軌道に復しゆくなり。」(『全集』第七卷、三九二頁) 南方のいう「事」に注目してみると、「縁」は「事」を生じるところで、「起」となったりならなかったりするということになる。「縁」はまた、「物」や「心」との接触のしようによって、さまざまな「事」を生じ、世界を形成している、と南方は言うのである。

「故に、今日の科学、因果は分かるが(もしくは分かる見込みがあるが)、縁が分からぬ。この縁を研究するがわれわれの任なり。しかしして、縁は因果と因果の錯綜して生ずるものなれば、諸因果総体の一層上の因果を求むるがわれわれの任なり。」(『全集』第七卷、三九二頁) すなわち因果の法則は、今日の科学で解き明かす可能性はあるが、縁と起が分からない。それを解明するには、科学そのものを俯瞰する視点が必要であり、大日如来を中心とする密教的世界がそれを与える、と彼は考えた。端的に南方の科学観を示しているのは、次のような言葉である。「科学というも、実は予をもって知れば、真言の僅少の一部に過ぎず。」(『全集』三七

二頁)ここで南方は、科学が解き明かすことができるのは世界のごく一部にすぎない、と言っている。だがこのとき同時に、彼は科学の可能性を語っているのである。世界の一部なりとも、科学は解き明かすことができるのだ、と。

#### 四 科学と「小生の曼陀羅」

南方は帰国すると、那智の山奥に引き籠もり、一時中断していた法竜との書簡往復も再開された。そのなかで、南方はついに「小生の曼陀羅」について語り始める。

「ここに一言す。不思議ということあり。事不思議あり。物不思議あり。心不思議あり。理不思議あり。大日如来の不思議あり。」(『全集』三六四頁)

「大日如来」という言葉自体は、真言密教という宗教のなかにあるが、南方にとってそれは宗教世界のなかだけで通用するものではない。南方はこの曼陀羅について「科学を基として立てた論」

(『全集』第七巻、三二六頁)と語る。狭義の宗教でもなく、狭義の科学でもないところから、世界を記述する道を彼は模索していた。「さて物心事の上に理不思議がある。(中略)これらの諸不思議は、不思議と称するものの、大いに大日如来の大不思議と異にして、法則だに立たんには、必ず人智にて知りうるものと思考す。」(『全集』第七巻、三六五頁)物不思議・心不思議・事不思議という三つの要素をひとまずは同列に並べて、その上位に理不思議が位

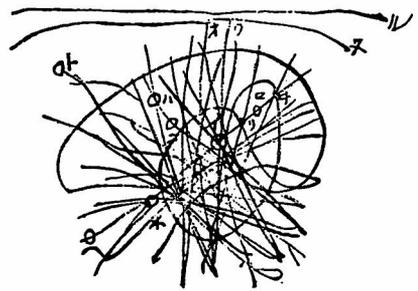


図3 (『全集』第七巻、p.365)

置していることがわかる。大日如来の大不思議とは、それら三要素を包括する理不思議を、さらに包括するものである。

「さて妙なことは、この世間宇宙は、天は理なりといえるごとく(理はすじみち)、図のごとく(括弧内省略、前後左右上下、いずれの方よりも事理が透徹して、この宇宙を成す。その

数無尽なり。故にどこ一つとりても、それを敷衍追求するときはいかなることも見出し、いかなることももなしうるようになっておる。」(『全集』第七巻、三六五頁)

さらに、この図に記され、記号をあてがわれた各点について、南方は説明を加えていく。

「その抄りに難易あるは、図中(イ)のごときは、諸事理の萃点ゆえ、それをとると、いろいろの理を見出すに易くしてはやい。(ロ)のごときは、(チ)(リ)の二点へ達して、初めて事理を見出すの途に着く。それまではまずは無用のものなれば、要用のみに汲々たる人間にはちよっと考え及ばぬ。(三)また然り。(ハ)

ごときは、さして要用ならぬことながら、二理の会萃せるところゆえ、人の気につきやすい。(ホ)また然り。』(『全集』第七卷、三六五—三六六頁)

多くの理が交差する点からものごとを見ると、そこに関連する現象の成り立ちがいちどに理解できる。(イ)は、その最たるもので、このような点をつかむと、世界全体の成り立ちを理解するのに、たいへん助けになる。また後述するように、人間というものはおおむね図の中心、つまり線がもっとも複雑に書き込まれたあたりに位置している。線が混雑したところは、人の世界に近く、人の必要に關係する頻度が高いので、その理を人が発見しやすい。また、線が交わっているところは、複数の理が交差するところなので、人の目にとまりやすい。逆に、そうした人間の必要から遠い理は、なかなか人は見出すことはできない。その可知と不可知の境界にあたるのが、つぎに述べられる(ヌ)である。「(一)ことに(ト)ごときは、(人間を図中の中心に立つとして)人間に遠く、また他の事理との關係まことに薄いから、容易に気づかぬ。(中略)(ヌ)ごときに至りては、人間の今日の推理の及ぶべき事理の一切の境の中で、(この図に現するを左様のものとして)(オ)(ワ)の二点でかすかに触れおるのみ。』(『全集』第七卷、三六六頁)

最後に(ヌ)との関連のもとに、(ル)という、南方の科学觀と、世界の見え方を考えるうえで重要な一線に突き当たる。これ

が、人間が見出し理由づける世界の限界を示すと同時に、人智によつて知ることのできる世界の可能性を示しているのである。「(ル)ごときは、あたかも天文学上ある大彗星の軌道のごとく(中略)わずかに(オ)(ワ)の二点を仲媒として(中略)どうやら(ル)なる事理がありそうに思わるといふぐらいのことを想像しうるなり。』(『全集』第七卷、三六六頁)

(ル)はいまのところ知ることではできないから、不可知である。だが、科学を真言のなかでポジティブに考える南方にあつては、不可知が、可知になるということも潜在的には可能なのだと考えられる。たしかに(ル)を知ることが難しいが、(ヌ)と(ル)とのあいだに絶対的な違いはないのである。さらに南方は言う「さてすべて画にあらわれし外に何があるか、それこそ、大日、本体の大不思議なり。』(『全集』第七卷、三六六頁)

### おわりに

——科学と宗教にたいする第三の視点へ

近代的知性のあり方を知ってしまった南方は、宗教的世界觀のなかだけで充足することはできなかった。南方にとつて、科学に対する批判と希望は、つねに宗教に対する批判と希望とパラレルな關係にある。彼は「物界」に閉じこもる科学を批判し、「心界」に引きこもる宗教を否定する。一方、あるべき宗教は、あるべき科学は、という問いかけにおいて、宗教と科学は交差するのであ

る。その交差する点に「大日如來の大不思議」がある。

心界や物界を包摂する世界全体を記述する術を、南方は密教的  
世界觀に見出した。世界を貫く理不思議を見極めなければ「事  
条理」を説明することはできない。理不思議の果てに彼は「大日  
如來」を見たのである。だがここで注意すべきは、彼の曼陀羅で  
は、大日如來の下位に科学が包摂されているけれども、同時にそ  
の曼陀羅は「科学を元として」描かれたものだということである。  
南方の思想は、密教的世界觀に支えられながらも、他方でその密  
教的世界を科学によって解析しようとする姿勢に貫かれている。

そのような互いに矛盾し、対立する姿勢を南方は併せもっていた。  
そうした緊張關係によつてのみ可能となる、科学と宗教にたいす  
る第三の視点を彼は獲得していたといえる。その意味で南方の思  
想は、彼の科学觀と密教的世界觀との絶えざる緊張關係において、  
発展してきたのである。<sup>(5)</sup>

(1) 南方のテキスト及び図は、『南方熊楠全集』（平凡社、一九七二  
年）より引用した。

(2) 芳賀直哉「熊楠の自然——南方熊楠の自然觀、宗教觀について」  
『宗教研究』（日本宗教学会）六九（一）一九九五年六月、一五七—  
一七五頁。

(3) 松居竜五『南方熊楠 一切智の夢』朝日新聞社、一九九一年。

ほかに松居編『南方熊楠を知る事典』（講談社、一九九三年）があ  
る。

(4) 三村泰臣「アリストテレスと南方熊楠——森の中で生まれた二つ  
の思想」『比較思想研究』（比較思想学会）二四、一九九七年、五九  
—六四頁。

(5) 南方の思想を、明治政府による国土再編との関わりから論じたも  
のとして、千田智子「明治政府の宗教政策と国土空間再編の論理」  
千葉大学編『生命・環境・科学技術倫理研究』（二〇〇〇年）を参  
照されたい。

（せんだ・ともこ、環境倫理、東京工業大学大学院）